



新しい創造

「クリスマスの前に①」

今年もあとわずか。回を含め今年はあと二回というので、韓国シ

リーズの途中であるが、休んで「クリスマスの前に」と題して今年を振り返る。



幼子の誕生を待つ我が家の馬小屋

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

東日本大震災。今も遺体すら見つからない人を含めると死者は二万人、さらに原発事故による汚染のため多くの人が避難生活を強いられている。

カトリック仙台教区では、パウロの言葉から「新しい創造」を復興に向かつていく基本計画・方針に据えて立ち上がった。

遠く離れた私たちもこれに呼応し、募金、震災復興のためのチャリティバザーなどをし、今もミサの際は「東

日本大震災被災者のための祈り」を欠かさず捧げている。

パウロの言葉「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者」洗礼を通してキリストと結ばれ、神の新しい創造にあずかるのだ。

「新しい創造」という信

仰理解を通して「あなたにとって新しい創造とは」をテーマに、去る十一月二十三日、山口市の県教育会館で山口・島根地区のすべてのカトリック教会が参加して地区大会が開催された。妻がわずか十分間の体験発表ではあるが「病から学んだこと」と題して話をした。

妻は三年前に脳幹梗塞を患い、左半身にまひが残り「要介護Ⅰ」。週三回、デイケア・サーピスに通いながらリハビリに努める。「失ったものを数えるよりも、何もできないことを悲しむよりも、なんでもない日常生活の中にある喜びを見つけ、与えられたものに感謝することの幸せを病から学ぶ」婚姻の秘跡に生きる時、新しい創造を感じ

る。私も協力しながら短く原稿にまとめた。そのことを思い出しながら「主の降誕を祝うクリスマス」を大切にすることは新しい創造の始まりではないかと思

う。三人の子供は独立し、夫婦二人だけの生活だが、二日ばかりで馬小屋をはじめクリスマスの飾りつけを終わ

り、幼子イエスの誕生を待つばかりである。この季節、カトリック教会の聖堂を訪れると、リースの上の四本のろうそくを見る。「アドベント・クラウン」：アドベントとは待降節の意味で、クリスマス前の四週間のこと。つまり主の降誕を待ち望み、一週間に一本ずつ常緑樹の葉で作ったリース（これをクラウンツという）の四本のろうそくに火をともし、四本のろうそくは旧約の時代といわれる四千年の象徴で、イスラ



待降節の象徴である
4本のろうそく

エルのみは四千年にわたって救い主（メシア）の到来を待ち望んだ。こうしてイエス・キリストが誕生し、新約の時代が始まったというのがカトリック教会の考えである。だから旧約聖書と新約聖書を使うが、イスラエルの民の多くが信じるユダヤ教はイエス・キリストを認めず、今もメシアを待ち望み、旧約聖書のみを使っている。

今では信仰に関係なく世界中の人々が祝うクリスマス。クリスマスは神による新しい創造にあずかるため、神が愛するひとり子、イエスをこの世に遣わされたことを感謝する日なのである。

「新しい創造」という信

「新しい創造」という信